

DV スクリーニングを用いた看護面接法の研究
～ H 病院産婦人科外来での取り組みから～

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会行動クラスター
松岡 史子

本研究は、DV スクリーニングを用いて支援活動を行っている H 病院産婦人科において、事前調査から実際にどのような取り組みが行われているのかをインタビューし、その上で DV スクリーニングを用いた看護面接の重要性に焦点を置いた。そして DV スクリーニングを用いた面接の際にどのような看護面接が用いられているのか、DV スクリーニングを用いた面接で患者にどのようなサービスを提供することにつながるのか、DV スクリーニングを行うということが日常の看護業務にどのように影響しているのかという 3 点について調査した。

方法は、H 病院産婦人科外来の看護職者 5 名(助産師 4 名、保健師 1 名)を対象に半構造化面接を行い、対象者の了解を得て録音し、逐語録を作成した。分析は木下康仁氏による修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチを用い、看護面接の概念形成と、それを基にカテゴリーを作成した。各カテゴリーから DV スクリーニングを用いた面接による看護職者の援助展開を図式化し、患者サービスを提供する動きと、日常業務との関連をまとめた。

その結果、DV スクリーニングを行う際に用いられている看護面接法は「無理のないように会話を展開させる」「患者が語れるという状況のセッティング」「患者の隠れたニーズを読み取る」「円滑な援助を提供する流れ作り」「新たな役割意識の活用」「患者への気づきの働きかけ」「患者への行動の働きかけ」「患者の苦悩に寄り添い見守る」「日常業務と変わらない対応」の 9 つのカテゴリーで示された。そして各カテゴリーから援助展開を図式化すると、援助の中心となるカテゴリーは「円滑な援助を提供する流れ作り」であり、これをコアカテゴリーとした。

看護職者はコアカテゴリーを中心として、他のカテゴリーとの相互作用により、様々な面接技術を養い、患者のエンパワメントを促進していた。つまり DV スクリーニングは DV 被害に遭われている方の早期発見だけでなく、コアカテゴリーを中心とするような看護面接を展開することで、患者の持っている力を引き出すことにつながるという結果になった。問診表による DV スクリーニングだけでなく、面接を通して行うことがより必要であり、看護職者の面接技術の役割が大きい事が示唆された。

日常業務への影響については、DV スクリーニングを行うことは看護職者にとって日常業務の一つとして存在しており、大変な作業ではないことが分かった。むしろ少ないスタッフの中では必要な作業であった。これらのことから、DV スクリーニングを既存のスクリーニングの中に取り入れて実施することが、患者に対して普段と変わらない意識を生み、よりよい看護ケアにつながるという事が示唆された。